**加藤 凍星 （かとう・とうせい）**

**１、プロフィール**

俳人。高校教諭。昭和35年頃より句作を始め、49年句誌「渋柿（のち渋柿園）」に参加。52年頃より鷹羽狩行に傾倒。55年、第１回狩座賞受賞。56年、第１回弘前俳句賞受賞。

＜生没＞

1935（昭和10）年９月17日～1981（昭和56）年12月30日

＜代表作＞

句集『甕の水』『加藤凍星遺句集』

＜青森との関わり＞

中津軽郡和徳村（現弘前市）生まれ。津軽地方で高校教員をしながら、句作と普及に努め、渋柿園俳句会代表となる。

**２、作家解説**

昭和10年９月17日、中津軽郡和徳村大字百田字岡本10の２に生まれる。本名、粕美。村立静修小学校、新制和徳中学校、県立弘前高等学校を経て、26年４月、中央大学商学部に進学した。古典音楽、油絵、囲碁など多趣味な学生生活を送り、33年３月卒業。

33年４月から母校弘前高等学校に非常勤講師として勤務。翌34年11月、県立五所川原農林高等学校に教諭として赴任する。

35年５月弘高句会（齋藤日出於世話人）に参加し、句作をはじめる。十和田俳句会（増田手古奈主宰）にも入会する。

38年11月、米沢孝子と結婚。39年８月、長男拓彦誕生。40年、「氷海」入会。42年４月、次男牧彦誕生。この頃から、雅号「凍星」を用いる。

46年４月、五所川原農林高校鶴田分校に転勤。49年６月、齋藤日出於のグループが「渋柿」を創刊、凍星も参加する。51年４月、弘前工業高等学校に転勤。

52年１月から「氷海」主宰代行の鷹羽狩行に傾倒。３月から「渋柿」の編集に携わる。53年１月「渋柿」は「渋柿園」に改題。４月、弘前大学付属病院で直腸腫瘍手術を受け、約３ヵ月入院する。８月「氷海」の後身「狩」が創刊され、巻頭を飾る。

55年１月、第１回狩座賞受賞。２月、日出於急逝により「渋柿園」代表となる。８月、肺腫瘍で東北大学付属病院に入院。10月、左肺上葉の一部を残して切除する。11月、弘前大学付属病院に移る。11月20日、現代俳句選書シリーズの第８巻として『甕の水』（東京美術社）が出版される。

56年11月、第１回弘前俳句賞受賞。12月30日、弘前大学付属病院で死去。行年46。「渋柿園」２月号が、＜加藤凍星追悼号＞を組む。

60年11月、５回忌を期し、藤田沈流らによって『加藤凍星遺句集』が、渋柿園俳句会から刊行された。

**３、資料紹介**

〇『加藤凍星遺句集』

図書

1985（昭和60年）年11月30日

194mm×140mm

第二句集。五回忌に渋柿園俳句会によって編集刊行された。第一句集『甕の水』発行後、逝去するまでの１年余の闘病生活で作られた、多数の作品から300句が選ばれ収められた。俳句の他に、文章19篇が収録されている。